

学生の授業評価からみた本学スキー実習の授業改善への取り組み

木村博人*, 福島邦男**, 大橋信行**,
川和田毅*, 坂入明***, 森尻強*, 梅谷千代子****

(平成13年10月4日受理)

Improving the Ski Class on Physical Education through Student Evaluation

Hiroto KIMURA*, Kunio FUKUSHIMA**,
Nobuyuki OHASHI**, Tsuyoshi KAWAWADA*, Akira SAKAIRI***,
Tsuyoshi MORIJIRI* and Chiyoko UMETANI****

(Received on October 4, 2001)

キーワード：授業評価, 授業改善

Key words: Student evaluation

I. はじめに

大学改革に伴い、各大学では学生による授業評価(学生評価, Student Evaluation: 以下SEと略記)が実施されており、授業のFeed Back(以下FBと略記)情報としての学生授業評価の試み¹⁾²⁾³⁾がなされ始めている。

体育学研究室では、各集中実習においてSEをFBの一環として位置づけて実施してきており、より良い授業づくりを目指している。

SEは、単なるアンケートとは異なり、授業改革・改善のためのFB情報を収集するために行われるアンケートのことである。SEは大学教員資質開発(Faculty Development: 以下FDと略記)の一環であることが重要であろう。

また、授業の改善について、安岡(1995)⁴⁾は、SEが明らかとなり、授業改善が要求され、組織全体として授業改善を期待するのであれば、授業改善も組織として取り組まなければ大きな効果は期待できないと述べている。本研究室でも、授業の目的に学生の評価を反映させることで、授業の改善を図っていくべきであると考えている。SEの測定に関しては、実習前後の学生の意識を比較し、授業の目的が達成されたか否かによって判断することが

望まれよう。

これまで、多くの授業評価に関する報告は学生の意識や態度から授業の効果を測定するものが多かった。しかしながら授業の改善を図る上で重要な評価は授業目的の達成の程度と内容であると考えられる。授業の目的をより具体的な評価項目にまで細分化し、それぞれのSEを測定することで具体的な授業改善の内容や方法が導き出されるであろう。

II. 研究の目的

本研究の目的は、スキー実習前後の学生の意識や態度の変化を明らかにすることにより、スキー実習の授業改善のための一資料を得ることにある。

III. スキー実習の概要

1. 授業の位置付け

研究対象となったスキー実習は自然とスポーツB(共通科目、選択科目)である。標準開設年次は2年生で全学科に開設されている。

2. 実習の目的

本実習の目的は以下の3項目である。

I. 生涯スポーツへの導入

II. 安全で快適なスキーの実践能力の育成

*教養部, **教養部非常勤講師, ***教職教養科,

****国際コミュニケーション科

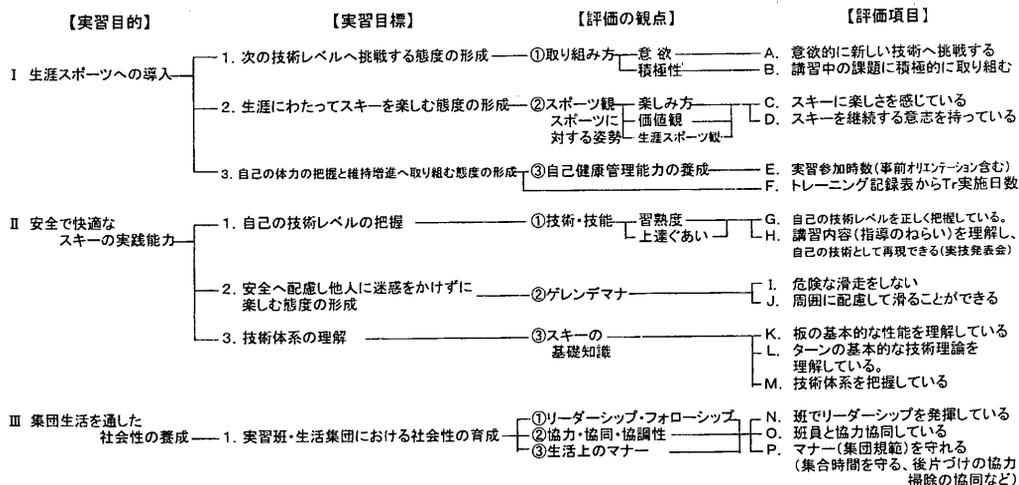


図-1 実習目的と評価項目の関連

III. 集団生活を通した社会性の養成

図-1は、これらの抽象的な目的がより具体的な行動レベルに細分化され評価項目を構成していることを示している。技術班の各教員はこれらの評価項目について学生を採点し評価する。

学生へもこれらの目的を細分化した評価項目に対応した項目の意識変化を調査している。

3. 授業概要

本授業は学内における4回の事前実習と3泊4日の学外集中実習で構成されている。

事前実習の内容は以下の通りである。

- ・第1回：オリエンテーション, 参加者確認, 事前実習日程の確認など
- ・第2回：体力測定(全身持久力、筋力、柔軟性), トレーニング講習
自己の現在の体力を把握し実習までの期間にトレーニングを実施することで体力の維持増進を図り実習に備えることを目的にしている。実施したトレーニングは記録し、提出することを義務付けている。
- ・第3回：スキー板の性能およびターン技術の理論講習
VTRと資料から前述の内容を理解し実習に備えることを目的に実施している。実習3日目に筆記テストを実施している。
- ・第4回：最終オリエンテーション
特に衣類の準備と健康管理に関して詳細に説明している。

3泊4日の集中実習の概要は以下の日程表を参照されたい。

初日に学生のスキーレベルが同程度になるように班編成を実施し、1~2名の教員や補助員がそれぞれの班を担当する。一班の人数は授業効率と安全性から初心者班が5名程度、他のレベルの班は8~9名程度である。指導者は本学体育学研究室の専任教員、教学助手、本学非常勤講師、他大学体育教員らで組織されている。

4. 実習期日と参加学生数

- 第1期：2001年2月2日~5日 学生65名
- 第2期：2001年2月7日~10日 学生72名
- 第3期：2001年2月12日~15日 学生56名

5. 実習場所

実習場所は妙高高原池の平スキー場で、宿泊は本学の妙高緑苑荘である。

IV. 研究の方法

本研究は平成12年度自然とスポーツB(スキー実習)の参加学生193名を対象に、質問紙調査を実習の前後で実施した。質問紙は実習目的に対応した項目で構成されている(資料1)。なお、質問紙の記入と回収は実習前調査が現地移動中のバス内、実習後が宿舎内であるため回収率はいずれも100%である。

平成12年度スキー実習日程表

初 日	2・3日目	最 終 日
7:00 板橋校舎集合	7:20 食当配膳開始	7:20 食当配膳開始
7:30 バス出発	7:30 朝食	リネン・茶道具回収
↓	休憩・講習準備	室内整理整頓
↓	9:00 送迎バス寮前発	7:30 朝食
↓		9:00 送迎バス寮前発
↓	9:15 スキー場着	9:15 スキー場着
11:30 現地参加者集合	各班ごとに講習開始	実技発表会
11:45 緑苑荘着予定	↓	終了後各班ごとに
宿泊室へ入室	↓	講習開始
12:30 開講式(食堂)	講 習	↓
スキーレンタル	↓	各班ごとに昼食
昼食・講習準備	↓	↓
14:00 送迎バス寮前発	各班ごとに昼食	13:00 講習終了
スキーをバスへ搬入	↓	スキーをバスへ収納
14:15 スキー場着	↓	13:30 送迎バススキー場発
班編成後講習開始	↓	
↓	講 習	13:45 緑苑荘着
↓	↓	貸スキー格納
↓	↓	大掃除(乾燥室含)
↓	↓	宅配便受付
16:00 講習終了	16:00 講習終了	14:30 閉講式
スキー格納	スキー格納	
16:30 送迎バススキー場発	16:30 送迎バススキー場発	15:00 解散
		↓ バス寮前出発
16:45 緑苑荘着	16:45 緑苑荘着	↓
休憩・入浴	休憩・入浴	↓
		↓
17:45 食当配膳開始	17:45 食当配膳開始	↓
18:00 夕食	18:00 夕食	↓
		↓
19:00 ミーティング	入浴	20:00 JR池袋駅前着予定
日程の確認	休息	
諸注意・伝達事項		
その他		
(班別ミーティング)	19:30 スキー講話(2日目)	
	基礎理論テスト	
	(3日目)	
	(班別ミーティング)	
20:30 入浴・休息	20:30 入浴・休息	
22:00 入浴終了	22:00 入浴終了	
23:00 消灯	23:00 消灯	

V. 結果および考察

1. スキーレベルの変化

表-1は、スキーレベルを「1まったく初めて」「2経験はあるがほとんど初めて」「3ブルークボーゲンができる」「4シュテムターンができる」「5パラレルの大回りができる」「6パラレルの小回りができる」の6段階に分けたとき、該当する自己のレベルを回答してもらった結果を実習の前後で比較したものである。

表-1 スキーレベル比較

	実習前	実習後
平均値	2.70	4.13
標準偏差	1.20	1.11

P<0.001

表-1から実習前に平均値2.7であったものが、実習後には4.13に向上し、0.1%水準で有意差が認められた。このことから本学スキー実習は学生のスキーレベル向上に役立っていることがわかる。

スキーレベルの分類に「1まったく初めて」があるため、まったくの初めての参加学生は実習後に必ず「2」以上を回答することから平均値が向上することは予想できる。しかしながら、実習後の平均値と標準偏差から参加者の多くの者が「3ブルークボーゲンができる」レベル以上であることがわかる。今後スキーに参加する場合、ブルークボーゲン程度の技術は安全面からも体得しておく必要があろう。このことは本実習が掲げている生涯スポーツへの導入という目的に貢献しているといえる。

2. 目的I生涯スポーツへの導入に対する達成具合

生涯スポーツとは、生涯にわたり各個人が各ライフステージにおける体力や環境に応じて、スポーツを生活の質的向上のために取り入れていくことであると捉えることができよう。

スポーツの一活動種目であるスキーを生涯にわたり継続していくためには、まずスキーを楽しむ態度が形成されていなければならないと考える。次にまたスキー技術への挑戦する態度が必要であらうし、そのためにはスキーに取り組める体力と健康管理能力が必要である。そこで、この目的に対して「1. 次の技術レベルへ挑戦する態度の育成」「2. 生涯にわたってスキーを楽しむ態度の育成」「3. 自己の体力の把握と維持増進へ取り組む態度の育成」をより具体的な実習目標として設定した。(図-1)

以下に目的Iに対応した質問項目の結果を追っていきながら、目的への達成具合を考察していく。

なお、表-2~8は目的Iに対応した意識や態度について5段階で回答を求め、その平均値を示している。

表-2は「新しい技術に対する意欲」の実習前後の比較である。

表-2 新しい技術に対する意欲

	実習前	実習後
平均値	4.07	4.51
標準偏差	0.83	0.74

P<0.001

この表から実習の前後とも平均4以上の高い、新しい技術を体得しようとする意識が高いことがわかる。さらに、0.1%水準で有意差が認められることから、その意欲は実習後により強くなっていることがわかる。

表-3は講習への積極的な参加態度の変化を示している。

表-3 講習への積極的な参加

	実習前	実習後
平均値	4.27	3.70
標準偏差	0.70	0.91

P<0.001

この表から、実習前は4.27と高い値をしめしていたが、実習後には3.7と有意に低い値を示していることがわかる。これは、スキー参加に対する積極性が薄れたのではなく、技術講習会への参加が消極的になったと見るべきではないだろうか。束縛感の強い講習ではなく個人で自由に楽しみたいと考えているのではないだろうか。

表-4はスキーに楽しさを感じているかを調査した結果の実習前後の比較である。

表-4 スキーの楽しさ

	実習前	実習後
平均値	4.04	4.63
標準偏差	0.88	0.65

P<0.001

この表から実習の前後とも4以上の高い値を示す多くの学生がスキーに楽しさを感じていることがわかる。さらに0.1%水準で有意に向上していることからスキーの楽しさを実習の経験からより多くの学生が感じていることがわかる。

表-5はスキー継続の意志について実習前後で比較したものである。

表-5 スキー継続の意志

	実習前	実習後
平均値	3.80	4.31
標準偏差	0.95	0.86

P<0.001

この表から実習前は3.8であった値が4.31に有意に向上していることがわかる。今後もスキーを継続したいとする意志が強くなったことがわかる。

表-4,5の結果から本スキー実習は、多くの学生が生涯にわたってスキーを楽しむ態度を形成する場になったと考えられる。

表-6は自己の健康管理への意識について実習の前後で比較したものである。

表-6 自己の健康管理への意識

	実習前	実習後
平均値	3.41	4.58
標準偏差	0.95	0.66

P<0.001

この表をみると実習前は3.41であった値が4.58に有意に(0.1%水準)向上している。このことから、学生の健康管理への意識が高まったことがわかる。

表-7は自己の体力をどの程度認知しているかを実習の前後で比較した結果である。

表-7 自己の体力の認知

	実習前	実習後
平均値	2.75	3.65
標準偏差	0.94	0.81

P<0.001

実習前には2.75であった値が実習後は3.65まで有意(0.1%水準)に向上している。このことから自己の体力の認知度は高くなったといえる。

しかしながら実習後も平均値の値は他の項目に比べて高くない。

表-8は体力を維持・増進したいという願望について実習前後で比較したものである。

表-8 体力を維持・増進したい

	実習前	実習後
平均値	4.22	4.53
標準偏差	0.86	0.68

P<0.001

実習の前後とも4以上の値を示し、体力を維持・増進したいという願望が強いことがわかる。さらに、0.1%

水準で有意に値が向上していることからその願望は、実習を経て強くなったといえる。

表-9は体力維持・増進の方法を理解しているかを実習の前後で比較したものである。

表-9 体力維持・増進の方法

	実習前	実習後
平均値	2.75	3.65
標準偏差	0.94	0.81

P<0.001

実習前には2.9であった値が実習後には3.32に有意に(0.1%水準)向上している。しかしながら実習後においてもその値は他の項目に比べて高くない。

表-6,7,8,9の結果をまとめると、自己の健康管理や体力の維持・増進に対する意識は高まったが、その具体的な方法や知識の体得が不十分であることがわかる。事前実習(第2回)においては、体力測定を実施し測定値を点数化させて自己の体力の把握に努め、トレーニングについても資料を用いながら具体的な方法を提示している。この事前講習を効果的な内容にすることが今後の課題であると考えられる。また、実習期間中においても、健康管理や体力増進の方法を学生にフィードバックする機会を設定することも考えられる。

以上の結果と考察から、本スキー実習は、目的「I生涯スポーツへの導入」における「生涯にわたりスキーを楽しむ態度の形成」「次の技術レベルへ挑戦する態度の形成」について十分に達成されたといえる。しかしながら、「自己の体力の把握と維持増進」に関してはまだ不十分であり、事前実習における講習の内容などを検討すべきであることがわかった。

3. 目的II安全で快適なスキーの実践能力に対する達成具合

体育の成績評価の際、運動技能をどのように評価に反映させるかは重要である。本スキー実習においては、スキーレベルの優劣や向上率等よりも自己の技能を正確に把握しスキーを安全に楽しむ態度を重要視している。これは、本実習が競技スポーツのアスリートを育てるためではなく、生涯スポーツの実践者を育成することを目的としているからである。

このことから、「II安全で快適なスキーの実践能力」を目的とした。また、目的IIに対してより具体的な実習目標として「1. 自己の技術レベルの把握」「2. 安全へ配

慮し他人に迷惑をかけずに楽しむ態度の形成」「3. 技術体系の理解」を設定した。(図-1)

表-10は、自己の技術レベルの認知について実習の前後で調査した結果である。

表-10 自己技術レベルの認知

	実習前	実習後
平均値	2.51	3.59
標準偏差	0.97	0.79

P<0.001

この表から、実習前は2.51と低い値であったが、実習後は3.59へ0.1%水準で有意に向上が認められた。スキー実習は自己のスキー技術を把握することに貢献しているといえる。

しかしながら、実習後の値は他の項目と比較して高くない。さらに技術レベルの認知度を上げる方策検討すべきであろう。

表-11は、安全と事故防止の観点から、制御可能スピードでの滑降に対する意識の実習前後の比較を示している。

表-11 制御可能スピードでの滑降

	実習前	実習後
平均値	3.01	3.58
標準偏差	1.20	0.93

P<0.001

この表から、自己制御可能なスピードでの滑降をより意識していることがわかる。実習後の値が3.58と他の項目に比べて高くないが、これは意識はするものの技術が伴わないことがあるからであろう。

表-12は危険な滑降に対する態度を実習の前後で調べた結果である。

表-12 危険な滑降 S

	実習前	実習後
平均値	4.12	4.06
標準偏差	0.96	0.98

危険な滑降に対しては実習の前後とも高い値を示し、有意差は認められなかった。

表-13は板の性能について理解度を実習前後で比較したものである。

表-13 板の性能の理解

	実習前	実習後
平均値	2.56	3.69
標準偏差	0.85	0.78

P<0.001

板の性能の理解について、実習前は2.56と低い値であったが、実習後は3.69と有意に(0.1%水準)高くなっている。よりスキーを楽しむためには板の性能を理解し使いこなすことが重要であろう。理解度が有意に向上しているものの、さらに理解を深めたい。

表-14は、ターンの技術理論の理解度を実習前後で比較したものである。

表-14 ターンの技術理論の理解

	実習前	実習後
平均値	2.46	3.85
標準偏差	1.05	0.77

P<0.001

この結果も板の性能の理解と同様有意な向上を示しているものの、さらに全体的な理解度をアップさせたい点である。

事前実習(第3回)においてVTRや資料を用いて解説を行い、実習期間中に筆記テストも実施している。さらに板の性能や技術理論の理解度を向上させるためには、時間的な点からも実習期間中の実習日誌の活用を考えたい。実習日誌とは講習の内容を実習期間中毎日まとめるもので、担当教員に提出し教員は質問などに対し回答する形式をとっている。この実習日誌にターン技術や板の性能に関する質問や回答が実施されれば問題意識も高まり、理解度も向上してくると考えられる。

表-15は技術体系の理解について実習の前後で比較したものである。

表-16は次に挑戦する技術とその練習方法の把握について実習前後で調査した結果である。

表-15 技術体系の把握

	実習前	実習後
平均値	2.05	3.13
標準偏差	0.89	0.84

P<0.001

表-16 次の技術と練習方法

	実習前	実習後
平均値	1.88	3.22
標準偏差	0.78	0.94

P<0.001

表-15, 16においても表-13, 14の結果と同様実習後が有意に向上しているがさらに理解度をアップさせたい項目である。今後は実習日誌に添付されている「技術チェックリスト」をさらに活用できるようにしたい。

スキーの楽しみの一つとしてより高い技術レベルの獲

得が挙げられよう。技術体系を理解し自己の技術レベルを正しく把握することができれば、次回のスキーへの動機付けにもなりうると考えられる。

以上の結果と考察から、本スキー実習は、目的「Ⅱ安全で快適なスキーの実践能力」の実習目標である「自己の技術レベルの把握」「安全へ配慮し他人に迷惑をかけずに楽しむ態度の育成」「技術体系の理解」について有意に向上させる効果がみられた。しかしながら、どの目標に対しても理論的な理解は充分であるとはいえず、実習日誌や技術チェックリストの効果的な活用を検討したい。

4. 目的Ⅲ集団生活を通じた社会性の養成の達成具合

本スキー実習は宿泊を伴う集団生活の場であり、そこから社会生活上のマナーを学び取ることも重要であると考えている。

そこで、目的「Ⅲ集団生活を通じた社会性の養成」を設定し、リーダーシップ、協調性、生活上のマナーなどを具体的な評価の項目として設定した。(図-1)

表-17はリーダーシップの発揮について実習の前後で調査した結果である。

表-17 リーダーシップの発揮

	実習前	実習後
平均値	2.35	2.77
標準偏差	0.90	0.89

P<0.001

この表から実習の前後とも中位値の3を越えていないことがわかる。実習の前後では0.1%水準で有意に向上していることが認められるもののリーダーシップをとることに消極的である学生像がうかがえる。

表-18は講習班での協力行動について実習の前後で調査した結果である。

表-18 班員との協力

	実習前	実習後
平均値	4.51	4.35
標準偏差	0.67	0.74

P<0.001

実習前は4.51であった値は実習後には4.35に有意に(1%水準)下降している。実習の前後とも4を超える高い値を示しているものうまく協力的な行動がとれなかったことによると思われる。

表-19は、集団生活のマナーについて実習の前後で調

査した結果である。

表-19 集団生活のマナー

	実習前	実習後
平均値	4.56	4.51
標準偏差	0.62	0.70

P<0.001

実習の前後とも4.5を超える高い値を示し、有意差は認められなかった。学生たちは集団生活のマナーを守れたと高い割合で感じていることがわかる。

学内での事前実習、宿舎でのオリエンテーションなどにおいて、時間厳守をはじめ集団生活上のマナーについては逐一伝達していた。それに学生がよく呼応し、集団マナーを守ることが実践できたと考える。しかし、集団の先頭にたちリーダーシップを発揮するまでにはいたらない。講習、宿舎での生活の中でリーダーシップを発揮する場面が特に設定されていないことも一因であろう。講習班や宿舎内で各学生に様々な役割を分担し責任をもたせるようにすることも考えてみたい。

V. スキー実習の検討事項

今回の調査から、ほとんどの項目において実習後に有意に向上が見られたことは、スキー実習の目的をほぼ達成していることがわかる。

しかしながら、以下のようないくつかの改善点も指摘された。

- ① 自己の健康管理あるいは体力を把握し、維持増進していく方法や理論の理解をより深める。
- ② スキーにおける基礎的な理論をより理解させる。
- ③ 集団内でリーダーシップを発揮できる場面を多く設定する。

①、②においては実習日誌、技術チェックリストの活用方法の検討、事前実習の内容検討を実施することで改善を図ることができる。

③においては各自に役割を分担することが考えられる。しかしながら、学生の負担が過度になることが考えられ、さらにその結果他の目的にまで影響すると予想されるため、どの程度の役割を与えることが適当か徐々に見極めたい。

VI. まとめ

本研究の目的は、スキー実習前後の学生の意識や態度の変化を明らかにすることにより、スキー実習の授業改

善のための一資料を得ることにある。本学スキー実習に参加した学生を対象に実習目的に対応した質問紙による調査を実施したところ、実習目的はほぼ達成されていることがわかった。しかしながら、いくつかの検討すべき点も見出された。すなわち、①自己の健康管理あるいは体力を把握し、維持増進していく方法や理論の理解をより深める。②スキーにおける基礎的な理論をより理解させる。③集団内でリーダーシップを発揮できる場面を多く設定する。の3点である。これらの点については、現在も使われている実習日誌やチェックリストのかつ範囲を拡大すること、学生にも役割を分担することなどで改善を図っていきたい。

参考および引用文献

- 1) 榎本直文, 綿祐二, 桜井智野雨, 平野貴也: 大学体育における学生の授業評価 7, 東京都立大学体育学研究, 第23号, pp.21-30 (1998)
- 2) 榎本直文, 綿祐二: 大学体育における学生の授業評価: 6, 東京都立大学体育学研究, 第22号, pp.27-38 (1997)
- 3) 松島宏, 北岡和彦: 体育科目集中授業に対する授業評価とその評価の背景について, 武蔵野女子大学紀要, 32(2), pp.209-218 (1997)
- 4) 安岡高志: FDの実践 東海大学における試み, 大学時報, 44, (1995)

Summary

The purpose of this study is to improve the ski class on physical education through student evaluation.

It found that goals of the physical education ski were approximately achieved from change of the consciousness and attitude of the students before and after physical education ski.

However, there was a point of some advancement, too.

It is the following three.

It understands the way of managing the health of the self and the way of improving physical strength in the maintenance more deeply.

They understand the basic theory about the skiing more deeply.

It makes the place which shows leadership.

(資料1)

スキー実習アンケート (事前)

No. 1

____年 ____月 ____日記入

このアンケートはスキー実習をより良くするために実施するものです。成績評価には一切影響しません。みなさんの率直な意見を聞かせてください。

I. 以下の質問に答えてください。

1) あなたの参加期と実習番号を () 内に記入してください。 参加期 () 期 実習番号 ()

2) あなたのスキーレベルに該当する項目の番号に○印をつけてください。

- | | | |
|---------------|-----------------|----------------|
| 1 まったく初めて | 2 経験はあるがほとんど初めて | 3 ブルークボーゲンができる |
| 4 シュテムターンができる | 5 パラレルの大回りができる | 6 パラレルの小回りができる |

II. スキーや実習に関するいくつかの意識や態度が以下に挙げてあります。それぞれの項目に対して、あなたの意識や態度はかがですか? 「5. 全くその通り」から「1. 全くちがう」までの5段階で表した時、あなたの意識に最も近い番号に○印をつけてください。

	全	そ	の	ち	く	全		全	そ	の	ち	く	全
	く	の	の	ち	く	く		く	の	の	ち	く	く
	通	通	が	が	が	通		通	通	が	が	が	通
	り	り	う	う	う	り		り	り	う	う	う	り
1) 新しいスキー技術に 意欲的に挑戦したい	5	4	3	2	1		10) 私は自己でコントロールできる スピードで滑降する	5	4	3	2	1	
2) スキー講習の課題には 積極的に取り組みたい	5	4	3	2	1		11) 危険な滑降は絶対にしない	5	4	3	2	1	
3) スキーは楽しい (初心者は推測で回答して下さい)	5	4	3	2	1		12) スキー板の性能を理解している	5	4	3	2	1	
4) 何歳になってもスキーを 続けていたい	5	4	3	2	1		13) どのようにしたらターン できるかを説明できる	5	4	3	2	1	
5) スキー実習にかかわらず、 健康管理には気を配っている	5	4	3	2	1		14) スキーの技術体系(簡単な技術 から困難な技術までのつながり) を把握している	5	4	3	2	1	
6) スキーにどの程度耐えられる 体力を持っているか知っている	5	4	3	2	1		15) 私は次に挑戦する技術と その練習方法を知っている	5	4	3	2	1	
7) 現在の体力を維持・増進したい	5	4	3	2	1		16) 講習班や宿舎内でリダーシップ を発揮してみんなをまとめたたい	5	4	3	2	1	
8) 体力を維持・増進する方法を 知っている	5	4	3	2	1		17) 講習班の人達に協力して 行動したい	5	4	3	2	1	
9) 自己のスキー技術レベルを 正しく知っている	5	4	3	2	1		18) 私は集団生活のマナーを守る	5	4	3	2	1	

スキー実習アンケート (事後)

No.1

____年____月____日記入

このアンケートはスキー実習をより良くするために実施するものです。成績評価には一切影響しません。
みなさんの率直な意見を聞かせてください。

I. 以下の質問に答えてください。

1) あなたの参加期、実習番号および講習班を () 内に記入してください。

参加期 () 期 実習番号 () 番 講習班 () 班

2) あなたの現在のスキーレベルに該当する項目の番号に○印をつけてください。

1 まったく初めて 2 経験はあるがほとんど初めて 3 ブルークボーゲンができる

4 シュテムターンができる 5 バラレルの大回りができる 6 バラレルの小回りができる

II. スキーや実習に関するいくつかの意識や態度が以下に挙げてあります。それぞれの項目に対して、あなたの意識や態度はかがですか? 「5. 全くその通り」から「1. 全くちがう」までの5段階で表した時、あなたの意識に最も近い番号に○印をつけてください。

	全	そ	の	ち	全		全	そ	の	ち	全
	く	の	の	ち	く		く	の	の	ち	く
	通	通	が	が	う		通	通	が	が	う
1) 新しいスキー技術に 意欲的に挑戦したい	5	4	3	2	1	10) 私は自己でコントロールできる スピードで滑降する	5	4	3	2	1
2) 今後一般のスキー講習も 積極的に参加したい	5	4	3	2	1	11) 危険な滑降は絶対にしない	5	4	3	2	1
3) スキーは楽しい	5	4	3	2	1	12) スキー板の性能を理解している	5	4	3	2	1
4) 何歳になってもスキーを 続けていたい	5	4	3	2	1	13) どのようにしたらターン できるかを説明できる	5	4	3	2	1
5) 常に健康管理には気を配りたい	5	4	3	2	1	14) スキーの技術体系 (簡単な技術 から困難な技術までのつながり) を把握している	5	4	3	2	1
6) スキーにどの程度耐えられる 体力を持っているか知っている	5	4	3	2	1	15) 私は次に挑戦する技術と その練習方法を知っている	5	4	3	2	1
7) 現在の体力を維持・増進したい	5	4	3	2	1	16) 私は講習班や宿舎内でリダーシップ を発揮してみんなをまとめた	5	4	3	2	1
8) 体力を維持・増進する方法を 知っている	5	4	3	2	1	17) 私は講習班の人達に 協力して行動した	5	4	3	2	1
9) 自己のスキー技術レベルを 正しく知っている	5	4	3	2	1	18) 私は集団生活のマナーを守った	5	4	3	2	1